自分の頭で考える
人間の育ち方

世界の一流は「子ども」に何を教えているのか

冷泉彰彦
Akihiko Reizei

What Global Leaders Teach Their Children

CROSSMEDIA PUBLISHING

はじめに

早いもので、渡米してから33年になりました。

この間、ずっとアメリカ北東部のニュージャージー州プリンストンに住んで、前半は3人の子育てに奮闘してきました。

プリンストンは大学の街ですが、妻の勤務先でもあるプリンストン大学について言えば、米国に来た当初、いきなり驚かされたことがあります。

キャンパスにはクラシックなヨーロッパ風の校舎が点在しているのですが、入口の階段や校舎内の階段で、学生が座ったり寝そべったりして本を広げているのです。

最初はいかにもアメリカらしい「お行儀の悪さ」だと思って見ていたのですが、実は漫然と読書をしているのではありませんでした。それぞれの授業の直前に、資料として指定された本を読んで「それに対する意見を整理してくる」という宿題をやって

いたのでした。

ディスカッション形式の授業が多いのが理由ですが、階段に座り込んだりしていたのは、とにかく内容に集中していたからだったのです。

驚かされたと言えば、3歳で渡米し、英語がまだ理解できなかった長男が、幼稚園の終業式で「いちばん頑張った」という賞をもらったのにもびっくりさせられました。もちろん、ありがたかったのは確かですが、意味合いとしては漠然と、「新しく来た子どもを歓迎している」という印象を持ったのでした。

ですが、教育についてさまざまな角度から考えるようになったあとに振り返ってみると、そこにはひとつの価値観が貫かれているのを感じます。

それは、**子どもに「困難」を与えるのはよいことであり、それによって成長をさせる**という思想です。

あるいは、**教育とは「結果」ではなく、「機会」と「期待」を与え続けること**という思想と言ってもいいかもしれません。

先ほどの長男の話で言えば、周囲の保護者も大きな拍手を送ってくれましたから、今から考えると、そうした思想が共有できていたと言っていいと思います。

子どもたちを育てる傍ら、現地の幼稚園から高校、大学に至るそれぞれの学校に、保護者として関わってきました。また、地域のスポーツ活動や音楽活動などを通じて、多くの子どもたちがどう育ってきたのかも見てきました。

子どもの友人や隣人など、ずっと追いかけてきた子どもたちの多くは、名門大学を卒業して、今ではエンジニア・医師・会計監査などの職種で、全米を舞台に活躍しています。

宿題は「必ず家でやる」もの？

また1997年以降は、プリンストン大学と連携して設立されたプリンストン日本語学校の高等部で、日本文学や日本史を教えるようになりました。

ここでも、当初、少し驚かされた経験があります。

ある週に宿題を配ったところ、生徒から「今すぐここでやっていいか」と尋ねられたのです。私はダメという理由はないので許可しました。

おそらく他の日本人教師からは「宿題は家でやるものだから今はやってはダメ」と言われた経験があり、慎重に許可を求めてきたのだと思いますが、あとから考えると、その生徒は優れた自己マネジメント力を持っていました。**少しの「すきま時間」も活用してさまざまな課題で結果を出す「マルチタスク遂行能力」**を当時から磨いていたのです。

彼女はやがてトップクラスの大学を経て、研究者として活躍していますが、その片鱗（へんりん）は高校生時代から見えていたというわけです。

このプリンストン日本語学校では、彼女のような日本人・日系人の高校生を教え、多くの卒業生を送り出しています。

彼らの半数は日本の大学に進学する一方で、半数はアメリカの大学に進学しています。具体的には、卒業生を、プリンストン、コロンビア、コーネル、カーネギー・メロン、ジョンズ・ホプキンスなど多くの大学に送り出してきました。

彼らの相談に乗りながら、高校の期間を通した成長を見守り、そして卒業後も折に触れて連絡を取り合う中で、「アメリカの大学受験制度」を生きた形で経験できたことになります。卒業生の多くは、シリコンバレーやウォール・ストリートなどで活躍したり、研究者として後進を育成していたりします。

こうした経験を通じて、ひとつの確信に至ることができました。それは、

- 「日本人は、グローバルな社会では、差別されたり特殊な存在とされたりして、活躍することはできない」というのは完全な間違い

ということです。そうではなくて、

- 日本人は、日本語と日本文化という強いベースを持っており、これにグローバルな世界で通用するスキルを乗せることで、最先端で活躍できるし、組織や分野のトップに立てる

ということです。

このことは、私の送り出した卒業生たちが証明してくれています。

本書を特にお読みいただきたい方

この本は、教育評論でもなければ、日本と世界の文化を比較する読み物でもありません。また、留学へ向けたハウツーを述べた本でもありません。そうではなくて、具体的に次のような方々にお手に取っていただければと思って書いています。

- グローバリズムとAI革命が進行する中で、お子さんにどんな教育環境を与えればよいか、悩んでおられる方
- 思春期を迎えたお子さんに対して、どんなアプローチをしたらよいか、迷っておられる方
- 日本の教育について、論争のための論争ではなく、子どもたちが世界の変化に適応するために、具体的にどう変えたらよいか、現場から考えておられる方

こうした方々、つまり子育ての現場、教育の現場で時代の変化を受けて試行錯誤を繰り返しながら、日本の将来を担う次世代に希望を託そうとしているみなさんを読者として想定して、本書は書かれています。

その意味で、この本は、「世界『では』こうなっている」という「出羽守（でわのかみ）」として、情報を上から下に流して済まそうという姿勢は徹底的に排除しています。そうではなくて、日本という具体的な視点から、何が有効なのかを読者のみなさんと一緒に考え、議論を深めたいという思いから書きました。

そうした点で、読み進めれば感じていただけると思いますが、過去のどんな教育書ともまったく異なった立ち位置の本だと自負しています。

本書の各章では、次のようなテーマを取り上げます。

まず第1章は、**18歳での「自立」を目指す考え方が基本であること**です。

多くの国では子育ても、そして高校の教育も、18歳の時点で自立するということを

目標にしています。そんな、グローバリズムとＡＩの時代に適応した「期待される18歳の人物像」をまずお話しします。その上で、「全人格を問う」アメリカの大学入試の考え方・人の見方を通して、この「人物像」のイメージをより具体的に議論していきます。

第2章は、**そうした人物が実際にどう選抜されているか**です。

前章でお伝えした「人物像」を踏まえて、アメリカの大学における「学生選び」の具体的なプロセスや、高校生の側から見た大学の捉え方、学びとキャリアとの関係などについて見ていきます。

続く第3章は、**各年代で、親や学校はどういうことを教えているか**です。

18歳で自立するために、そしてグローバリズムとＡＩの時代に適応していくために、幼稚園から高校までの各年代で、親や学校はどんなことを教えているのかお話しします。また、お金、自主性、生活の管理など「学校の勉強以外」でどんなことを子どもに教えているのかについても、具体的な例をお伝えしていきます。

最後の第4章は、**思春期教育における心構えとは何か**です。

日本でいう思春期は、英語圏では「ティーンエージャー」として、やはり最も難しい世代だとされています。この年代の子どもたちには、大人はどんな姿勢で臨んだらいいのか。基本と応用を含めてお話ししようと思います。

日本では、中高生の6年間は制服など校則で縛るとともに、何よりも受験というハードルを用意して逸脱を防ぐようにしています。逆に言えば、「それだけ」が思春期の教育であり、思春期に発揮される爆発的な成長力を活かす工夫もないですし、親がしっかりと見守る習慣も弱くなっています。

その一方で、世界では、

- **あえて失敗を経験させ、乗り越える力を身につけさせる**
- **年齢相応の枠に閉じ込めず、早熟へ向かわせる**
- **介入しなくても、ひたすら見つめ、見守り続ける**

など、思春期の若者の成長を支援する方法論が実行されているのです。実例も含めて

こうした方法論をご紹介していきます。

全体の流れとしては以上ですが、それぞれのエピソードはできるだけ独立して読めるようにしてあります。ですから、お子さんの年齢などに合わせて、みなさんの関心のある話題から読み始めていただいても、理解しやすく役に立つようにしています。

「時間」と「空間」の違いをどう乗り越えるか

とにかく、**子育ては「未知の世界との格闘」**だと思います。そこには2つの時間が流れているからです。

- 親にとって、自分が子どもだった時代と、自分の子どもが今を生きている時代がまったく違う、その時間の流れ
- 子どもが今、学んでいる時代と、やがて子どもが自立していく未来とは時代がまったく違う、その時間の流れ

これに加えて、「空間の違い」もあります。

- 日本とグローバルな世界の違い
- その中で、日本もやがてグローバルな世界に追いついていくという流れ
- 一方で、グローバルな世界が日本に学び、日本の当たり前がグローバルな世界に受け入れられていく流れ

つまり、時間と空間が動いていく中に、お子さんの将来があり、そこでお子さんが確かに自立できるように育てていかなくてはならないということです。

本書は、その意味で、足かけ30年目に入った教職経験、そして3人の子どもたちを育てた経験をベースとして書きました。

しかもその3人すべてが、日本語と英語、日本文化とグローバルな文化の重なりを身につけながら自立していきました。それぞれの成長を目撃できたということは、経験として貴重な財産になったと思っています。その役に立つ部分を、読者のみなさん

と共有できたらありがたく思います。

この本が多くのご家庭で、また学校で、時には子どもたちも巻き込んだ形で、世代を超えたディスカッションの材料になれば、これ以上の喜びはありません。

２０２６年初夏　ニュージャージー州プリンストンにて

冷泉 彰彦

世界の一流は「子ども」に何を教えているのか

目次

はじめに……3

第1章 世界が期待する「18歳」のレベル感はどのくらいか

アメリカの大学が思い描く学生像は、グローバル社会の標準でもある……22
AIに置き換わった仕事は、二度と人間には戻ってこない!?……25
目指すはまず「第2グループ」……29
「授業の質向上」に貢献できる人材こそ理想……34
研究課題をすでに決めている「スーパー人材」は引く手あまた……39
文武両道は何のため？ そして、どうやって成立するのか……43
Coffee Break　スポーツ・エリート優遇にならないの？……46

日本とアメリカで違うリーダーシップの定義……48
アートに関わり、理解することが重視される理由……53
ハーバードはなぜホームレス高校生を何人も合格させるのか……57
自己管理能力は「マルチタスク処理」に表れる……63
反対に「期待されない人物像」はどんなものか……73

第2章 「AI時代でも活躍できる人間」の具体的な選抜方法

アメリカの大学の「人の選び方」と、大学の「格」……80
大学で学ぶこととキャリアの関係は、日本とこう違う……90
なぜ内申書を重視し、日本の就職試験のような面接をするのか……95

第3章

年齢に応じたメッセージをどう伝えるか

プレゼンの訓練はすでに幼稚園から……108
ポジティブな声かけで育つ野球少年たち……113
アメリカの部活事情はこうなっている……118

Coffee Break　文化系の課外活動にもある段階別チーム……124

子どもに家事を分担させることの意味は？……126
お金の使い方をどう学ばせるか……130
家族でゾロゾロ皆既日食を追いかけるのはなぜ……134

Coffee Break　家族旅行はドラマの「定番」シチュエーション……138

学校と塾の「二重教育」が当たり前の日本……140
大学へのモチベーション点火のスタート地点は「13歳」……145
日本の数学教育に潜んでいる問題……152
「本当によい質問」とはどんなものか……159
20代で一流オーケストラを支配した「若き巨匠」マケラ氏の秘密……162
米国在住のノーベル賞受賞者、真鍋淑郎博士が語る「好奇心」の原点……167

第4章 思春期の子どもたちと向き合う

日本の思春期教育がもったいない理由……174
世界の思春期教育に見られる3つのトレンドとは……181
スマートフォン・SNSの問題をどう乗り越えるか……186
若者のメンタルを守り切る、英国で人気の「保守的オヤジ」……190

父から娘に伝える野球愛……195
ダディズ・ガール（お父さんっ娘）の秘密……198
娘の「自己肯定感」を多感な時期に守り切った両親……203
「プロム」という学校公認のダンスパーティー……208
英国王室の思春期教育はどうなっているのか……213
おわりに……217